
DARKER THAN BLACK 灰塵の都

ボブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DARKER THAN BLACK 灰塵の都

【Nコード】

N7253M

【作者名】

ボブ

【あらすじ】

DARKER THAN BLACK 流星の双子から2年後の世界。予言が成就された世界は一体どこにむかっていくのか。

捏造設定、オリキャラ多いです。

プロローグ

「結局予言の通りか。・・・変えることができなかったのか、それとも・・・変える気がなかったのかな？アンバー。」

深夜の東京のビルの屋上で、一人の男が遠ざかる月と流れる星達を眺めながらそう呟く。

男の眼下ではアメリカ軍の戦車が我が物顔で公道を走っている。
「ボス。どうやらアメリカ軍は組織関係者の粛清を最優先に行っているようです。三船様は自害されたことで、ここも危ないので避難してください。」

「やれやれ、騒がしいことだ。とはいえ組織創設者の一人として、自らの作った組織と同朋の最後くらい見届けなくてはな。」

「同朋というと・・・三船様ですか？」

「いや、パブリチェンコ博士さ。・・・彼とは組織の前進だった河木調査団からの仲間だったからね。」

そういうと男は右手に持っていた花を床に置く。

「とはいえ皮肉なことだ。ゲートを、いや予言をなんとかしようと集まった仲間の息子が実は予言の子だとはね。まあ私もパブリチェンコも三船のジイサンとちがってアンバーと会った時に予言を阻止するのはとくにあきらめていたがね。」

そして男達は月に背を向けて歩き出す。

「門より出でしものか・・・それがあの黒い光の柱を指すのかそれとも・・・どちらにしろ予言はもう無い。これからは好きに動くでしょう。契約者らしく。」

男がまた何か呟いた瞬間強い風がビルの屋上を吹き抜ける。

その風が止む時には男達の姿はもうどこにもなかった。

物語が動くのは今から2年後、そして東京エクスプロージョンから4年の月日がたったころであった。

黒き齒車は再び回り・・・

「逃げたぞ。捕まえる。」深夜の東京で怒号と銃声が飛び交う。それを向けられている男は片足を引きずりながらビルの屋上に向かって階段を走っていた。

息を切らしながらも逃げていた男は、ビルの屋上に辿りつく。それに息つく間もなく男の後を追って数人の男達が屋上に駆け込んでくる。

銃を向けながらその集団の一番前にいた男が逃げていた男に近づく。

「そこまでだ。メシエコードDT-322。コードネーム、ファン。貴様を逮捕する。」

「ふん、公安風情がなめるなよ。」

男はそういうとふところから何か取り出す。

「まさか。手榴弾。」銃をむけている男、斎藤は一瞬ひるむ。

「斎藤さん。」斎藤の後ろにいた茶髪の青年が焦った声をだす。

「大丈夫だ、河野。契約者は自殺なんかない。」

「どうかな？最近はいレギュラーな契約者がトレンドなんだ。」

そういつて手にもっていたものから何か引き抜き、斎藤達の方に投げる。

「まずい。伏せる。」斎藤は叫ぶ。

だが、投げられたそれは爆発はせず、代わりにまばゆい閃光を発する。

「くそつ。閃光弾か。」光が消えた屋上で斎藤は呻く。追っていた男は既に姿を消していた。

「斎藤さん。部長から連絡ありました。こっからこの案件は米軍に

任せ自分達は署に戻るようにと。」

それを聞くと斎藤はくやしそうにこぶしをにぎりしめ。「課長さえたなら。」とつぶやく。それを聞き河野も神妙な顔をする。斎藤のいう課長が誰を指すのかわかったのだらう。

「ホント、どこ行っただんでしょね。霧原課長。」

東京エクスプロージョンから4年。契約者と呼ばれる異能力者の存在が公表されたり、ヘルズゲートから謎の黒い光の柱が立ったり日本がアメリカを中心とした諸国により制圧されたりと実に色々なことがこの4年間で起こった。いや、起こっている。

だが斎藤達、外事4課の面々にとって、それよりも4年前の外事4課の解体。そして2年前の課長であつた霧原美咲の失踪の方がはるかにシヨックな出来事であつた。

2年前に起きたあの黒い光の柱が生まれた第2次東京エクスプロージョンの直前まで取れていた連絡はいまは一切取れず、1年前に再編された外事4課にはやはり霧原の姿は無かつた。ただあくまで風の噂なのだが、現在「組織」と呼ばれ、各国政府に危険視されている集団に霧原の姿があるらしい。・・・もし、霧原課長を捕まえてはならないようなことになったら。そう斎藤に聞こうとして河野は止めた。

「やれやれ、助かつたよ。ジル。」

先ほどまで斎藤に追い詰められていた男はそこから5キロほど離れた空きビルの屋上で嘆息する。

「君の遠隔テレポーターシヨンは便利だが、遮蔽物が何もないとこるじゃないと使えないのが難点だね。」そういつてなおしゃべり続けるが、男の声に応える声はない。

「おい。なんのつもりだ。ジル。どこにいる？」そう呼びかけながらうろろ歩いていると男はなにかに躓き転ぶ。

「何だ一体・・・ヒイ。ジル・・・死んでいるのか。」男の目の前には金髪の白人男性が倒れていた。

倒れている男に近づいて男は慌てて脈を確かめようとする。すると「ずいぶんとにぶい契約者だな。」と男の後ろから低い声がする。男の後ろには黒いコートと仮面をかぶった一人の男が立っていた。「な。なんだあんな。あんなかジルをやったのか？」仮面の男はそれには答えず男の頭をがしつと掴むとそのまま床に叩きつける。

「メシエコードDT-322、コードネーム、ファンだな。」

「そ、そうだ。」男、ファンはあせって答える。目の前の仮面の男の声にはあきらかに殺気がこもっている。

「あんなもしかして黒の死神か。2年前に死んだんじゃ・・・。」

「うるさい。余計なことはしゃべるな。俺の質問にだけ答えろ。」仮面の男は掴んでいる手により力をいれる。

「わかった。わかったから。なにが知りたい。それとも誰か探しているのか。」ほとんど悲鳴に近い声でファンは叫ぶ。

ファンの契約能力は対象物の検索である。それが物であれ人であれ写真なり目視なりで対象物を認識さえすればそれが地球の裏側だろうが探し出すことができる。戦闘能力は皆無だがこの能力のおかげでどこかの組織に属することなくいままでフリーで生き抜くことができた。この仮面の男もそういった用で来たのだろう。そうでなければ自分は今頃殺されているはずだ。

「少し前イザナミがここに客として来たはずだ。」仮面の男はそう聞く。

「イザナミ？」ファンは聞き覚えのない名に戸惑う。

「銀髪の長い髪をした北欧系の女だ。」

「ああ、あのじょうちゃんか。でもイザナミなんて名じゃなく、銀イシつて名乗ってたぞ。」ファンは思い出す。数日前に数人の男女。その中には明らかに契約者も含まれていた。とともに現れた客だ。

その答えに満足したのか少し腕の力をゆるめるとなお尋ねる。曰く
「あいつはおまえになにを聞いた？」

「あいつは誰といっしょにいた？」

「あいつは今どこにいる？」と必死な声色で

それらの問いを聞いてファンは一瞬ためらったが契約者は空気な
ど読まない。と考え「あんた、なんか奥さんに逃げられた旦那みた
いだな。」と・思ったことをそのまま言った。頭を殴られた。

「あのじょうちゃんはなんかだれか探していたみたいだな。俺の能
力には写真とかなんか対象物を映したものが必要だったから、結局
探さなかったけどよ。それと今の東京とゲートの情勢をいろいろき
かれたな・・・あとうーん一緒にいたのは男が3人女が2人。見た
感じだからはっきりはいえんが最低2人は契約者だったなあ。」フ
アンは殴られた頭をさすりながら仮面の男に話す。

先ほどまで頭をつかまれていたがファンが逃げないとわかったら
しい仮面の男は今壁に背を預けてファンの話をきいている。

「今はどこかわからんがとりあえず渋谷に向かうといってたなあ。」

「渋谷か。わかった。」仮面の男はそう言って、壁から背をはなす。
やれやれ、やっと解放される。ジルをちゃんと埋葬してやらない
とな。などと考えていると、ドン。という衝撃音がファンを襲う。

仮面の男がやったのかと思ったが、目の前でその男は驚愕に目を
開いている。コイツではない。では誰が？・・・そこでファンの意
識はとぎれた。

仮面の男、黒は目の前で腹から血を流して倒れた黒髪ヘイの男を一瞬
茫然とみた後すぐに我にかえり距離をとって、戦闘態勢をとる。

「BK-201だな。」倒れた男の背後、影のところから2人の
男があらわれる。

気配は無かった。となると1人が空間移動能力。もう1人が・・・

バコツという音とともに黒がさきほどまでいた場所がなぎはられる。2人組の内の1人スキンヘッドの男が放ったダーツがその正体だ。だが普通のダーツとは思えないほどの威力を放っている。「どこの組織か知らないが。邪魔をするな。」黒はそういうとナイフを握り2人組の方に向かって放つ。

その後、日が明けると発見されたのは4人の男の遺体。その中に黒の姿は無かった。

「それは本当ですか。」

東京の都心のビルの一室に黒いスーツを着た集団がいた。

その集団の1人であるメガネをかけた女性、霧原美咲が目の前の男に尋ねる。

「ああ、間違いない。」そう答えたのもまたメガネをかけた男性だった。

ゴルゴ似のその男は名を小林という。

「しかしいまさら何故？」美咲はみけんにしわをよせて考える。

「確かに、奴の動きは謎だが、それ以上に今は重要なことがある。」

美咲の横に立っていた葉月がその思考を中断させるようにしゃべる。

「そうだ。奴が生きていたそのことよりも、奴が2年間ドールネットワークに一切ひつかからずに過ごしていた方が重要だ。それはつまり・・・」

「イザナミが生きている。・・・そういうことですな。」小林の言葉で美咲がひきついで話す。

「そして今、彼が探知されたということは・・・彼とイザナミは別行動をとっているということ。」

その言葉に小林はうなずくと茶封筒をデスクから取り出し美咲に渡す。

「正直にいつて、今はB K 201よりもイザナミのほうが圧倒的に危険だ。君は葉月とともに三鷹の別部隊と合流して、イザナミの後を追ってくれ。」

「わかりました。ではB K - 201はしばらく泳がせるということですか。」

封筒を受け取り、美咲は小林に尋ねる。それを聞き、何故かすごく疲れた顔をした小林は「いや、奴については自分にまかせてくれとオレイユが言いだしてな。まかせることにした。」

それは任せたのではなく押し切られたのではないか。と美咲は思ったが、すごく遠い顔をする上司に対しそれをいうのもためらわれ、スルーすることにした。

「わかりました。マダムがそういったなら大丈夫でしょう。悪いようにはしないでしようし。」そういつて美咲と葉月は身をひるがえして部屋から出て行った。

彼女達が出て行ったあと小林の溜息をB G Mに残った人たちは業務を続けていた。

彼らはかつて3号機関、今は組織と呼ばれる集団である。

「くしゅん。・・・あら誰か私の噂をしてるわね。」

同じころ埼玉にある高級ホテルの一室で短い金髪をした白人女性

がそう呟く。

彼女はマダム・オレイユと呼ばれる情報屋である。

「間違いなく悪口だな。」

「あら、ひどいわね。リカルド。」マダムは暴言を吐いた男を見やる。といつてもそこにいるのは人ではなく猫なのだが。

「ひどいのは君の存在そのものだ。・・・で、本当なんだな。黒がみつかったというのは。」

「ええ、昨日ハデに暴れていたからね。そのせいで早速CIAのエージェントに襲われたみたいだけど。」そういつてクスッと笑う。

「やれやれあれから2年もたったというのにあいかわらずだな。と猫^{マオ}は思う。だがそれもまた黒らしい。」

「で、俺にどうしろってんだ。」猫は尋ねる。

「彼に会ってきて、彼女について聞いてきて。」

「彼女って?」聞きながらも「なんだ黒のやつ、また女がらみでもめてんのか。変わらないにもほどがあんな。」と猫は思う。

「イザナミよ。あなたには銀っていったほうがいいかしら。」

「な、なに。銀の奴生きてたのか。」さらっと返された問いの答えに猫はびっくりする。

生きていたことは素直にうれしいが、しかし・・・。

猫の顔をじつとみていたマダムはほほえむと「心配しなくてもいいわ。」と言う。

「なに?」

「便宜上イザナミとよばれているけど彼女はあの時とはちがうわ。イザナミ化した時生まれていた人格は消滅しているし。能力自体は持つてるけど、今の彼女はあなたと仲間だったところと同じ銀よ。それにそうじゃなきゃ黒の死神がやさぐれずにあんな必死こいて探すわけないじゃない。」さらっと黒に対する暴言をはきながらマダムは話す。

「そうかよかった。・・・ってなんで君がそんなこと知ってるんだ。」

「私に分からないことはないわ。」

その言葉に猫は脱力する。なにが恐いつてそれが虚勢でなくおそろく真実なのが恐い。というか冷静に考えると黒のやつまた銀のやつに逃げられたのか。会った時このネタでからかってやろう。

「とはいえ彼女に関して言えば、彼女完全にドールネットワークをシャットダウンしてるから居場所わからないのよね。何が目的なのかもわからないし。・・・だからリカルドあのダメ男にそこんとこ聞いてきて。」

さらつと無理を言われた猫は渋い顔をする。

「しかし黒の奴が素直にしゃべるとは思えんが・・・それどころかへたしたら殺されかれん。」

「大丈夫。交換条件をだすから。あとすぐに殺されないために連れて行ってほしい人たちがいるの。」

マダムはそういうとドアの方に向かって「入ってきて。」と呼びかける。

ボディーガードでも連れてくれるのかね。と思っていた猫はドアから除いた顔を見てフリーズする。

なんなんだ今日は俺は白昼夢でもみているのか、だが契約者は夢なんてみないし・・・

「どうしたの？猫」

「どうやらあまりのことにフリーズしてるようね。」やれやれといった風に首をふるとマダムは声の方を向いて笑いながら話かける。

「で、どう？話はきこえてたでしょ？」

「うん。僕はいいよ。ずっと会いたかったし。」

「そう、じゃあよろしくね。蘇芳、ジュライ。」

猫のち 甘党

埼玉の高級ホテルの一室で猫がフリーズしていた思考から覚めると、目の前で蘇芳とジュライが自分を心配そうにのぞいていた。

「どわー。」

「なんだよ、猫。心配したのに、人の顔みるなりそんな幽霊みたような声ださないでよ。」

蘇芳が耳をふさぎながら、不満げに言う。

「ス・スマン。しかし本当に蘇芳なのか？それにジュライも。」
ありえない。2人とも2年前に死んだはずでは？

そんな気持ちを読み取れたのか蘇芳は決まりわるげに笑うと、「そんなに見なくても僕もジュライも幽霊でも幻覚でもないよ。」と話します。

「確かに2年前のあの時僕もジュライも死んだ。っていうか死んだっていうより、イザナミ・・・銀インの能力ちからで紫苑が作ったもう一つの地球に送られた。」

蘇芳は窓の方を見ながら思い出す。そう、今でも覚えてる。ヘルズゲートの、契約者のいない東京。温かい家族。優しい、けどなにかが足りない世界。

「だけど気付いたら僕とジュライはこっちの世界に戻ってた。それが1年前のことで、それからずっとマダムのお世話になってたんだ。」

蘇芳の話を猫はじつと聞いていた。銀の能力や紫苑の計画、もう1つの地球については事件後聞いていたとはいえ本当に蘇芳とジュライはもう1つの地球に送られていたのか。

しかしそこで重要なことを思い出す。

「おいちよつとまで、1年前から世話になってたって、俺は一言も

そんなこと聞いてないぞ。」

「あら、リカルドそこ重要？」

マダム・オレイユは少しあきれたように言う。

「うるさい。答える。」

「・・・理由は簡単。まず1つ目に彼女たちが本物の蘇芳とジュライだとはまだしつかりは判明してなかったから。そしてもう1つがなぜこんなことが起こったのか不明だったから。」

それを聞き猫は蘇芳とジュライの方を思わず振り向く。

2人は昔と変わらない様に感じる。偽物なんてことありえるのだろうか。いや、よく見る。蘇芳は流星核を持っていない。

紫苑の能力で生み出されたコピーである蘇芳はその記憶を保つために流星核を手放すことが不可能であった。だが今の蘇芳は流星核をもつてない。ということは・・・偽物。

「待ちなさい。」急いで部屋から逃げ出そうとした猫をマダムは引き留める。猫の尻尾をふみつけることで。ギニャーという悲鳴が部屋中にひびきわたった。

「まったく偽物ならあなたに会わせるわけがないじゃない。彼女達は本物。ただ蘇芳は少し身体に変化があったわ。流星核なしに記憶を保つことができるようになった。つまり完全に人となったってところかしらね。」

蘇芳はそれを聞いて不服そうな顔をする。

まあ前は人間として不完全だっていわれてるんだ。そりゃ不満だよな。と思いつながら猫はさらに質問をする。

「その、蘇芳とジュライが本物だっていう根拠は？」

「うん、当然の疑問ね。もちろんDNA検査含め、様々な検査を行ったわ。でも決め手はイザナミからのメッセージかしらね。」

「銀の？」どうゆうことだ？

「半年ぐらい前かしらね。ドールネットワークを通じて私にメッセージが送られてきたの。それまでいくらこっちから接触しようとしてもオール無視だったから驚いたわ。でね、そのメッセージってのが、『蘇芳とジュライは本物。2人が送り返されたのは紫苑の意志。』っていうものだったの。」

「どうゆうことだ。」

「さあ。でも紫苑君はもう死んじやったし、科学検査でも本物だった結果がでてたしね。さらに彼女がそういうんだったらもう本物かな。って結論がでたのよ。」

「なんか適当だな。」

「まあ、そこらへんのとこも詳しいことはイザナミに直接聞くしかないからね。だからさっさと黒の死神に会ってきて。」

「やれやれわかったよ。といいながら猫はドアの方に向かって歩きます。それに蘇芳とジュライも付いてくる。その顔はあまり冴えない。」

「ま・当たり前だな。いくら検査を繰り返しても結局のところはわからない。自分がなにものか、なんのためにいるのかを切実に考えなければならぬというのはあまり精神衛生上良くない。」

「そしてふと猫は肝心なことを聞き忘れたことを思い出し、後ろを振り返る。」

「そつえば黒のやつ今どこにいるんだ？」

「それに対してマダム・オレイユではなく、蘇芳が答える。」

「それなら僕が知っているよ。黒が今いるのは……。」

同時刻 東京都内のある喫茶店

閑散とした店内には店の人間らしきエプロンをきた中年男性と力

ウンター席に座ってパフェを食べ続ける金髪の若い男しかない。

「おい、マスター。特製秋のモンブランパフェおかわり。」

喫茶店のカウンターの中央で1人の金髪の白人男性は声をはりあげておかわりを叫ぶ。

男の目の前にはパフェの空のグラスがところせましと並んでいる。

「まだ食うんかい、ログ。いいかげん糖尿病になるぞお前。」

カウンターの先にいるマスターとよばれた男はやれやれといった動作をする。

中年でやや白髪が混じったそのマスターは仕方ないなあ。とぶつくさいいながらも通算12杯目になるパフェを作る。

それを見てカウンター席にいるログと呼ばれた若い金髪の男性はにつこり笑う。

「仕方ないじゃないか。対価なんだから。」

「アホぬかせ。お前契約者なる前から根っからの甘党やつたろうが。」

急に怒鳴り声が聞こえて後ろを振り返ると、銀髪で無表情の女性と、こめかみに青筋をたてているがたいのいいスキンヘッドの大男と、冷めた眼をむける長身で切れ長の眼をした黒髪の女性が立っていた。

「おや、おかえり銀、^{イシ}ドクター。」

振り返って新たな来客の内、銀髪と黒髪の女性にそう笑いかける。意図的に無視されたスキンヘッドの大男はそれに対していらつとする。

「ログ。てめえ俺に対して挨拶はないんかい？」

それに対してログは自身の髪と同じ金の眼を眇めると「ああ、居たんだ。ジャイロ。」とすげなく返す。

それに対してジャイロと呼ばれた大男は「最初からいたわ。ボケ。」と大声で怒鳴り散らす。

「騒がしくするなら帰ってくれないかな。」

はあーとため息を吐きながらマスターが呟く。それとともに出来上がったパフェをカウンターに置く。

その声を聞いてジャイロは「すみません、マスター。」と申し訳なさそうに謝る。

「騒いでんのジャイロだけじゃん。」

と言うと、ログはパフェに手を伸ばしてそのまま口に入れる。

「ログため「下らない言いあいはいしないでちょうだい。ログあんたもさつさとそれ食べて頂戴。表に車待たせてるのよ。」

ジャイロの言葉を制して黒髪のドクターと呼ばれた女性がいらだったように言う。

「あいよ。ってことはなにか収穫あったの？」

パフェをまるで飲料水のように飲み下すとログはたずねる。

「収穫はあまりなかった。だけど組織にこちらの動きを感じかれた。」

ログの問いにそれまで黙っていた銀と呼ばれた銀髪の女性が答える。

それに対してログもそしてカウンターにいたマスターも顔をしかめる。

「なるほど確かにそりゃ急いで移動しなくちゃね。・・・ところでどこから漏れたの。」

椅子から立ち上がってカウンターにパフェの料金を置くと眼を細めながらログは聞く。

「黒から。」

ログの方を見ながら。もっとも銀には実際には見えていないのだが。銀はしっかりと、しかし少し困った風に言う。

「うん？黒の死神がどうしたの？」

「昨夜、CIAのエージェントと私達が接触した情報屋の計4人の契約者が殺されたわ。殺したのは黒の死神。それがドルシステム

を通して組織に・・・いえもう各国の諜報機関に知れ渡っていると考えた方がいいわね。とにかく知られちゃって。そこを足がかりに銀が生きていることも、私達の動きも感づかれちゃったみたいなのよ。」

ログの質問に対してドクターが困ったもんだわ。というふうに眉をひそめながら答える。

「やれやれよつぽど銀を連れていったことが気に食わなかったんだね、彼は。一応合理的な話し合いで決まったことなのに。・・・それでそれに対して龍^{リウ}はなんて？」

「龍は『元から予想していたこと。むしろ奴が動き回ることでこっちは動きやすくなるからほっとけ。』って言うつつたわ。まあ情報屋に接触して池袋行くゆう話をわざわざもらしたんはバレた時用にそっちの方に敵さんをミスリードするための偽情報やったからちよつどよかつたゆうこつちゃ。」

ログの問いに対してジャイロが黒に同情しつつ答える。

「さて・・・とそれじゃあ僕らはここからどこに行くのかな。」

一通りの話合いがおわってログがそう切り出す。

「東京タワー。そこに全員集合する。今回はマスターも来てって龍がいつた。」

それに対して銀が無表情で答える。

そしてすぐ店内から人の気配が消えた。

一方東京、池袋

フェイク情報を掴まされたとは知らない黒の死神は探し人を探して池袋中をねり歩いているとそこで予想外な人物と出会う。

選択するもの

蘇芳、僕が出来ることはおそらくこれが最後だ。

月が明るい晩だった。

蘇芳がいつものように家の窓から望遠鏡で星を眺めていると急に夜空から光の柱が落ちてきた。

何かなんだかわからない内に蘇芳自身も光で包まれ気が付いたら見たこともない場所に放り出されていた。地面には白い花が咲き乱れ、空には満天の星が光輝いている。

立ち上がって周りを見るとそこは見たことがないはずなのにどこか見覚えがあつてなぜだか知らないが涙がでてきた。

「やあ蘇芳久しぶり。プレゼントは気に入ってくれたかい？」

声がしてふりかえるとそこには蘇芳の知らない少年が笑って立っていた。

いや・知らないんじゃない。失くしただけだ。そうだこの自分によく似た少年は自分のたった一人の・・・もう1人の自分。

「紫苑。
しおん」

蘇芳は涙をぬぐってよく見てみる。そこにいるのは確かに紫苑。

蘇芳の双子の弟にして自分自身をコピーして蘇芳を創った、1年前ヘルズゲートで死んだはずの契約者。

「どうし・・・て。だって紫苑は。」

「死んだはずなのに？」

蘇芳の問いを先回りして紫苑が答える。そうだ死んだはずだ。紫苑はそして・・・蘇芳自身も。

「確かにもう元の世界では君も僕も死んだということになっている。」

「だけど正確には死んだ訳ではない・と顔面蒼白になっている蘇芳の顔を見ながら紫苑は語り出す。

「1年前イザナミによつて殺された人間は殺されたのではなくこちらの世界に送られただけなんだ。まあ元の世界では肉体が死滅してるから同じことといえばそうなんだけどね。」

「よく・・・わからない。どうということなの。」

「この世界はね、いわばバックアップなんだよ。地球という存在のデータを送る先のハード・・・つまりもう1つの地球を創り、流星核を使つて管理するのが僕の仕事。そして元の地球からデータつまり魂とでも呼ぶべきものを抜き取りこちらに送信するのがイザナミの仕事だったのさ。」

それが1年前の出来事の全て。だから別に蘇芳は死んだ訳ではないよ。と紫苑は話す。

その顔はいままでみたこともないほど穏やかで満ち足りた顔だった。

「いくら死んだわけじゃないっていったって・・・じゃあここは何なんだよ。それに紫苑はどうしてそんなことをしてたんだよ。」

いくら死んでないといつても元の世界では死んでいるということになっているのだ。それに蘇芳は別にここに送つてほしいと頼んだ覚えはない。元の世界で猫とジュライと・・・黒といっしょにずっと、ずっと一緒にいたかった。

「ここは元の地球と僕の創つた地球を繋ぐゲートの門前つてところかな。そして僕とイザナミが1年前あんなことをしたのはそれが契約だったからさ。」

「契約つて誰との？」

「さあ誰なんだろう。契約者を・・・ゲートを創つた存在・・・か

な？」

金色に光る未確認生物だったよ。そう言いながら紫苑は手のひらを何もない空間に押し上げるようにして挙げる。そうするとさっきまで何もなかったはずの空間から黒い光の柱が立つ。

「な、なに。」

蘇芳が黒い光の柱を見上げあとずさりながら紫苑に尋ねる。

「ゲートを開いたんだ。言っただろう、ここは元の地球とここを繋ぐ門前だと。・・・今僕はこっちのゲートを開いたんだ。その通路がこの黒い光。さあ蘇芳これがおそらく僕が君にできる最後のことだ・・・元の世界に戻りたいかい？」

いきなり急なことを言われ蘇芳は戸惑う。

戻りたいかって。それは戻りたいにきまっている。

「紫苑、戻れるの？」元の地球に。

「戻れるよ。」

少し悲しそうな顔で紫苑が言う。

「っじゃあ」戻りたい。というのを紫苑の手で制される。

「よく考えるんだ。蘇芳。2年前僕が計画とともに君をこちらに送ったのは君に選択肢をあげたかった為なんだから。」

選択肢？と蘇芳が首を傾けると、光の柱を背後に紫苑は話す。

「僕が創った世界は温かい世界だ。パパもママもいるしゲートも契約者もない。一方元の地球はひどいものだよ。契約者とゲート、そしてこれからはドールによって世界は混乱し、そしてよりひどい混沌とした地獄が待っている。・・・蘇芳。君が帰ろうとしているのはそういう世界だ。だけど君にはここに残るという選択肢もあるんだ。」

知らなければ選ぶことはできない。だが今確かに蘇芳は紫苑によって二つの世界を知り、そして選ぶ機会を与えられている。

紫苑にそう言われて蘇芳は眼をつむり思い出す。確かにここは温かい。契約者なのに、・・・いや生まれた時から契約者だった紫苑だからこそ望み創り上げられたのかもしれない平和な・・・ゲートさえなければありえたはずの世界。紫苑が創ったこの地球にいれば確かに蘇芳は幸せに一生をすごせるだろう。そしてそれは紫苑もそして死んだ元の地球のパパも望んだ事なのだろう。だけど・・・

「僕は帰るよ、紫苑。ここは確かに温かい。だけど足りない何かを埋めることがここではできないんだ。」

蘇芳は紫苑の顔をみながらはつきり言う。その足りない何かがないのかそれはもう蘇芳にはわかっていた。だからこそここには留まらない。会いに行かなくてはならない。・・・黒に。

その蘇芳の顔をみながら紫苑はやっぱりこうなったか。というように苦笑をすると蘇芳に近づき頭をくしゃつとなでる。

「後悔するよ、蘇芳。行ってしまったら僕が助けることはもう出来ない。」

「うん、わかってる。でも会いたいんだ。・・・ありがとう紫苑。選ばせてくれて。」

蘇芳の言葉に紫苑は薄くほほ笑むとゲートの前まで蘇芳の手を引く。

「さあ、行くんだ、蘇芳。道案内は彼がしてくれる。」

そう言っただけで紫苑が眼で示した方を見ると、黒い光の柱の前にジュライがたっていた。

「ジュライ！なんで。」

「君がいない世界には用はないんだってさ。僕はここで向こうのゲートを開くために爆睡中のイザナミを起こさないといけないから、ここでお別れだ蘇芳。」

ジュライに手を引かれながら蘇芳は黒い光の柱の中に進んで行く。そして蘇芳は振り返って紫苑に最後の言葉をかわす。

「本当にありがとう。紫苑。さよなら。」

「向こうにいったらマダムに伝えてくれ。事態は悪い方に向かっていくと。・・・ばいばいお姉ちゃん。」

最後の言葉は蘇芳に聞きたただろうか。いやもうどうでもいいことか。

紫苑がまた手のひらを押し上げると先程まであった光の柱はきれいさっぱり消えてしまう。

「さて・と。まずはイザナミを起こさないとね。」

イザナミに事情を話して起こせばイザナミは十中八九黒の死神の元を離れるだろう。黒の死神には悪いがそれで我慢してもらおう。そもそも人の姉をたらしこんだんだ。それくらいの罰はありだろう。

そんなことを思いながら満天の星の元、紫苑はイザナミと謎の金色の発光体がいる空間へと歩いて行く。

眼が覚めるとそこはヘルズゲートの中だった。そして気が付いたらジュライとともにマダムに保護され、さまざまな検査やなぜか訓練を受け。そして気が付いたら1年がたっていた。

そしていま眼の前にずっと会いたかった人がいる。

「蘇芳、ジュライ。なぜおまえらがここに。」

おい、俺は無視か。という猫の声をも無視して黒は眼を見開いて

こちらを見ている。

髪の毛は最初あったときほど長くはないが、肩にかかるほどにはのびている黒髪。

服装はいつもの黒コートではなく、町にとけこむためか白シャツにGパンといったラフなかつこうだ。

やっぱり昔のままとはいかない。だけど間違いなく目の前にいるのは黒だ。

「久しぶり、黒。」

この再会を後で後悔するのは紫苑のいう通りおそらく間違いないだろう。

だけどとりあえず蘇芳はこの再会に感謝する。

例えこの後、後悔したとしても今この瞬間の感情に嘘はないと証明するように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7253m/>

DARKER THAN BLACK 灰塵の都

2010年10月8日14時24分発行